

11 社会教育と活動

小樽には、住む人と旅行者の双方にとって、充実した学習環境がある。歴史的建造物、小樽市総合博物館、市立小樽文学館、市立小樽美術館、市立小樽図書館、日本銀行旧小樽支店金融資料館、おたる水族館、工房、ギャラリー、工芸の体験設備など、無料、有料のいずれにせよ、誰でも気軽に利用することができる。市民や旅行者が受講できる生涯学習講座や「小樽案内人」の検定試験用講座など、様々な学習プログラムも提供されている。

その他、以下に、小樽を非常に社会教育的な街だと思わせる、子どもや各世代の教育、学習に良いと思った点を挙げる。

- ・歴史的建造物の保護や伝統文化を大切にする姿勢が、古いものの中にある価値を知り、大切にすることの教育につながる。
- ・観光や港、商店、飲食店、ホテル、水産加工の工場などを身近で見ることによって、責任を伴う仕事がどのようなものなのか、実感として理解しやすい環境がある。
- ・以前、書いたような小樽人気質を育て、地域や社会貢献の教育につなげることができる
- ・イベント、行事、お祭りなどを通して、人と協力しながら大きなことを実現していくための関わり方を見せたり、教育したりすることができる。
- ・世界各国から旅行やボランティアに来る人たちを見たり、接したりすることで、国際交流について考え、学ぶことができる。姉妹都市などから来る外国人にも紹介すると喜ばれる伝統や文化が守られている。
- ・職人の会などが、次世代を生きる子どもたちの物づくりに対する理解や後継者発掘などを目指した活動を行っている。
- ・和食店や新鮮な海産物を提供する市場が多く、日本人の食性に合った生活をし、健康や食育につなげることができる。
- ・情操教育に良い自然が身近にある。
- ・生き物や植物に触れたり、学習しやすい環境がある。

- ・ スキーをはじめとしたスポーツ教育が活発なため、心身を鍛えることができる。
- ・ 小樽商科大学のような地域と密着した実学の教育で伝統的に成果を上げている大学があり、教育機関と地域が一体となって商業、観光、まちづくりに貢献することができる。その他、商業などに関連する人間の活動全般についても、大学や地域社会において、様々な学習を行うことができる。歴史、文化、文学、芸術、工芸、サービス、人間、語学、自然、海洋、水産、スポーツなど、挙げれば数限りない。

これらの理由で、土地が社会教育の教師、教材、場を与えられる機能と性質を持っている。

また、小樽は日本の近代史を、訪れる各世代が学びやすい場である。日本の近代史は、歴史の教科書の終わりの方に登場し、教師が教科書の初めから丁寧に教えているとなかなか十分に扱えないこと、戦争問題を扱うことのむずかしさなどから、教育が手薄としか思えない状況が続いている。近代史の学習を補助する場として、小樽は非常に良いところと考えられる。私自身もそのような場として、大いに活用させて頂くつもりでいる。

「小樽内 生涯私の 教師なり」（おたるない しょうがいわれの きょうしなり）

<活動やイベントを行いやすい環境>

小樽には、活発な活動やイベントを行いやすい環境も整っている。創作活動、文化活動、芸術活動、研究活動、社会教育的活動、観光補助活動、ボランティア活動、スポーツ活動、環境保護活動、宗教活動、交流活動、その他、イベントなど、呼び名はどうかであれ、以下のような理由で精力的な活動、発表を展開できる環境が整っているように見える。

- ・ 活動、イベントに良い影響を与えるものに恵まれている：自然・人・文化など
- ・ 活動、イベントの練習などの場に恵まれている：工房、アトリエ、スタジオ、グラウンド、学校など
- ・ 活動、イベントの発表の機会に恵まれている：運河周辺、野外、市民会館、市民センター、公会堂、ホール、イベント用ステージ、能舞台、グラウンド、ギャラリー、ホテル、商店街などで、コンサート、音楽祭、演劇、映画祭、踊り、能などの伝統芸能、スポーツ、写真展、絵画展、アートイベント、講演会、研究会、報告会、勉強会、

交流会、フェア、フェスタなどが活発に行われている。

- ・活動のPRの場に恵まれている：「小樽ジャーナル」のような世界各地から読むことができるメディア、新聞、テレビ、ラジオ、情報誌の地域情報コーナー、人が多く集まる場所での張り紙、HP、観光イベント情報を提供する団体など

また、小樽運河周辺は、演劇的な演出をするのに非常に向いている。橋や運河プラザ、散策路のように、観客が車の往來を気にせずにイベントや行事に参加できる空間がある。運河の散策路を歩いていたある日、以下の様な演劇的なイメージが頭の中に浮かんできた。

大正時代。運河の散策路の両端から、人力車に乗った美しい男女がそれぞれ登場する。服装からして、女の方が身分が高い。すれ違いざまに、初対面にも関わらず、ふたりとも、かつて会ったことがあるような懐かしさ、あるいは探し求めていた人に出会ったような驚きと感動に包まれる。それぞれが人力車を止め、一体、この感覚は何なのだろうかという独唱をする。男の方から歩みより、人力車に乗っている女の手を取るしぐさをする。女は、はにかみながらも、男の手を取って人力車を降り、二人はゆっくりと散策路を歩く。互いに自己紹介をするが、多くを語らずとも、お互いに分かりあえるような懐かしさが漂う。

次はありがちな展開と言われればそれまでだが、やはり困難が生じないと小樽らしくない。女の父親が、自分より身分の低い見知らぬ男と仲睦まじそうに歩く娘の姿を見て怒り狂い、女を運河から連れ去る。立ちすくんだ男は、以下の詩を独唱をする。これは男の父親が昔よく口ずさんでいた詩という設定であるが、これから展開していく険しい恋路を予見するかのような詩である。

～愛惜の詩（あいせきのうた）～

愛惜の詩 今 歌おう 我弱くとも
君思う 気持ち 忘れ難く 空を仰ぎ見る
愛惜の詩 今 歌おう この身焦がしても
ただひたすらに ゆかん 進む路 信じて

この詩で表わした心情は、小樽に似合う男女の気持ちを想像したものであると同時に、小樽という土地を想う人の心情を表した詩でもある。その場合、君というのは、小樽という土地そのものである。私自身、この詩を口ずさみながら、小樽への慕情を日々、募らせている。



OTARU 浅草橋 Jazz スクエア 2007
(写真提供・小樽ジャーナル)